

# 現代ドイツ語における文のモード

——要求文と願望文を中心に——\*

藤 縄 康 弘

## 0. は じ め に

本稿では、現代ドイツ語の文のモード (Satzmodus) を考察する。その際、要求文 ((0-01) を参照) と願望文 ((0-02) を参照) が焦点となる：<sup>1)</sup>

(0-01) Sieh mich nicht so an!

Hört mal alle her!

(0-02) Wäre ich doch nie hingegangen!

Wenn du mich nur wieder einmal besuchen würdest!

文のモードは、旧来、平叙文、疑問文、要求文の名の下に知られてきた<sup>2)</sup> もつとも、これは、伝統文法で往々にしてそうであるように、もともと厳密に、学術的になされたというよりは、感覚的になされた分類という性格が強い。加えて、古典的な文献学の主目的が、記述的文章による知識の伝承にあったこともあり、3つの範疇のうちでも、それとはおよそ異なる目的で用いられる要求文

---

\* 本稿をまとめるにあたり、R.ライネルト氏 (愛媛大学) には、事例の検討にご協力いただいた。記して謝意を表したい。

- 1) 文のモードと密接に関わるものの、異なる次元に位置する動詞の叙述法と混同が起きないよう、「命令文 (Imperativsatz)」という名称は避け、「要求文」とした。なお、「命令文」は、あとの3.で確認するとおり、実際、「命令法の文」という意味で広く通用している。
- 2) さらに感嘆文も、これに加わるが、本稿では取り扱わない。感嘆文についての包括的な説明は、Altmann (1993) や Näf (1987) にある。また、これを文のモードと見なすことに批判的な立場の Rosengren (1992) も参考になる。

や、3 範疇の外にある願望文には、十分な関心が払われてきたとは言い難い。

現行の文法書でも、要求文に関しての記述は概して少なく、あったとしても、大抵は、動詞の一活用形としての命令法の説明に終始する<sup>3)</sup>。従って、要求文のうちでも、命令法ではなく接続法第 I 式による要請文 (Heischesatz) は、ほとんど顧みられることがなく、願望文ともども、せいぜい接続法の特殊な用法として言及される程度である<sup>4)</sup>。

もっとも、Austin (1962) や Searle (1969) らによる発話行為論の台頭を経て、近年では、文のムード全般にも学術的関心の目が向けられるようになったことは確かだ。文の機能は何も事実、真実を表すことばかりではないとの認識が広まったのである。旧来から中心的な類型と見なされていた平叙文・疑問文に加え、要求文や願望文にまで視野は広げられた。その結果、例えば最新の文法書である Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997: 607ff.) (以下 IDS と略記) では、文のムードに関してひとつの章が割かれ、その記述は標記のものにまで及んでいる<sup>5)</sup>。

けれども、研究の進展は必ずしも見解の一致にはつながらない。とりわけ、要求文や願望文の場合がそうである。もとより、平叙文や疑問文に関しても意見の不一致はある。しかし、そうした不一致は、両者の構造や機能にいかん説明をつけるかといった、細目に関わるもので、平叙文や疑問文という範疇の存在やその外延など、基本的な点に関しては、ほぼ意見の一致をみていると言っていいように思う。これに対し、要求文は、文法的な範疇として旧来認められてきたものの、その外延は曖昧であるし(3. 節を参照)、願望文では、そうした

3) Engel (1988: 426ff.), Erben (1964: 73ff.), Grebe (1959: 128ff.) などがそうである。また、中には Eisenberg (1989) のように、文のムードの記述をまったく諦めているものもある反面、Heidolph/Flämig/Motsch (1981: 27ff., 766ff.) のように、文法と発話の関係に関する体系だった想定のもと、願望文まで含めて文のムードを詳述しているものもある。文のムードは、動詞の叙述法とは対照的に、文法書ごとの取扱いの落差が極めて大きい。

4) 例えば、Helbig/Buscha (1987: 205f.)。

5) もっとも、形式上、必ずしも文とは言にくい表現 (Nicht hinauslehnen! Frisch gestrichen!) も考慮して、伝達最小単位 (KM: kommunikative Minimaleinheit) のムードと呼ばれているが。

範疇の正当性自体がいまだに疑問視される状況である（4.節を参照）。

このように、要求文と願望文は、文のモード全般に対する関心の高まりを経てもなお、集約が依然として困難な文法現象である。この限りにおいて、両文のモードは、確かに周縁的なものであるのかもしれない<sup>6)</sup>。しかし、だからといって、それが提起する問題までもが周縁的であると、即断することは許されない。その構文や機能が使い手に比較的明瞭に意識されるものでありながら、それが十分に理論化されないでいるという現実には、むしろ、従来の理論の構築法のどこかに偏りがあったことを示唆してはいまいか。

## 1. 構文型と機能のプロトタイプの対応関係

文のモードへの理論的関心の起点にあるのは、特定の構文型が特定の機能と密接に関連するという事実である：

- (1-01) a. Du spielst Klavier. (平叙文)
- b. Spielst du Klavier? (疑問文)
- c. Spiele (doch mal) Klavier! (要求文)

(1-01)には、同一の命題内容に基いた3つの表現の例が挙げられている。3者は、一方では、構文の違いで互いに区別される：定形動詞第二位を取るのか、定形動詞第一位を取るのかで、aに対してbとcが区別され、さらに動詞の叙述法の種類により、aとbに対してcが区別される。他方、3者はその意図する発話の質の点でも、異なるものと理解される。すなわち、aが「聞き手にあたる人物がピアノを弾く」という命題内容の妥当性を提示する陳述の発話を実現するのに対し、bは当の命題内容の真偽をつまびらかにするための質問の発話を、cは命題内容を実際に生起させるための要求の発話を実現するのが、直観的に想起される用法である。

6) 現に IDS (663f.) でも、要請文と願望文は希求文 (Optativsatz) として一括され、これは文のモードのうちでも周縁的なものであると断っている。

そこで、平叙文、疑問文、要求文の名の下に区別されるものは、ひとまず、(1-02)のような、構文型と文の機能の規則的な対応関係にあるものと見なされるだろう：

- (1-02) 平叙文：構文型<sub>1</sub>(定形動詞第二位＋非命令法)－陳述  
 疑問文：構文型<sub>2</sub>(定形動詞第一位＋非命令法)－質問  
 要求文：構文型<sub>3</sub>(定形動詞第一位＋命令法)－要求

もっとも、(1-02)に見る対応関係から逸れる文の用法も、実際には可能である。例えば、(1-01 a)の構文型は、イントネーションによっては質問や要求の発話にも理解され得るし ((1-03)参照)、文法的・語彙的な条件次第では、質問や要求の発話のほか、陳述、質問、要求の3者のいずれにもうまく収まらない類の発話を実現することもある ((1-04)参照)：

- (1-03)a. Du spielst Klavier? (構文型<sub>1</sub>－質問)  
 b. Du spielst (jetzt) Klavier! (構文型<sub>1</sub>－要求)  
 (1-04)a. Ich fordere Sie auf, Klavier zu spielen. (構文型<sub>1</sub>－要求)  
 b. Ich eröffne hiermit die Sitzung. (構文型<sub>1</sub>－宣言)  
 c. Das werde ich tun. (構文型<sub>1</sub>－約束)

同様の状況は、他の構文型でも、多かれ少なかれ指摘することができる：

- (1-05)a. Kannst du mal das Fenster zumachen? (構文型<sub>2</sub>－要求)  
 b. Darf ich rauchen? (構文型<sub>2</sub>－許可の請願)  
 (1-06)a. Schäm dich! (構文型<sub>3</sub>－非難)  
 b. Hol dich der Teufel! (構文型<sub>3</sub>－無関心の表明)

(1-02)に示されたような、各構文型の機能との対応は、確かに直観的に想起されるものではあるが、実際には数ある用法のうちの代表例を示しているに過ぎない。この意味において、平叙文、疑問文、要求文といった文のモードは、プロトタイプの範疇であると言える。

## 2. 文の類型にアプローチする方法論

では、こうしたプロトタイプとして観察される文のモードの本質には、どのように迫ればよいのだろうか。方法論は、大きく3つに分かれると思う。

### 2.1 「遂行分析」に基づくアプローチ

ひとつは、いわゆる「遂行分析」<sup>7)</sup>に依拠するものである。このアプローチによれば、文は、深層構造に存在する Ich teile Ihnen mit ... や Ich frage Sie ..., Ich fordere Sie auf ... などの明示的遂行要素が削除変形されて成立する。そのため、先に確認したような、文の構造型と機能とのプロトタイプの対応関係は、表層構造と明示的遂行要素に伴われる深層構造とが変形によって規則的に媒介される関係として定式化され得ることになる。

もっとも、遂行分析は、すでに指摘されているとおり、さまざまな問題を抱える<sup>8)</sup>。ここで、そのひとつひとつに立ち入ることはできないので、本稿の議論に関連する重大な点のみ指摘しておこう。すなわち、遂行分析では、各構文型が結局のところ一様に、深層における明示的遂行要素の導く従属の構造に帰着する以上、私たちが文のモードのもとに見い出す構文型と機能の間の興味深い関係が、不当にも副次的な価値しか持ち得なくなることである。

例えば(2-01)と(2-02)を参照されたい：

(2-01) a. Kommen Sie *doch* herein!

b. Ich fordere Sie *doch* auf, hereinzukommen.

(2-02) a. Waren Sie gestern zu Hause? — Ja/Nein.

b. Ich frage Sie, ob Sie gestern zu Hause waren. — \*Ja/\*Nein.

(2-01)には要求、(2-02)には質問の表現が、ふたつずつ対置してある。とはいえ、(2-01)では同じ心態詞 *doch* が異なる発話の背景（およそ「とにかくお入りなさい」と「とにかく入って頂こう」の違いに相当）を暗示するし、(2-02)で

7) Ross (1970) や Sadock (1974) を参照せよ。

8) 例えば, Lyons (1977: 778ff.) を参照せよ。

は、件の質問の直接の答えとなる“Ja/Nein.”はaにしか後続しない。こうした違いは、aの発話が要求文ないし疑問文で実現される一方、bの発話が明示的遂行要素に伴われた平叙文で実現されることに密接に関連するものと思われる。しかし、遂行分析では、aとbはともに共通の深層構造に還元されてしまう。このアプローチでは、文のムードの効果を的確に把握することができないのである<sup>9)</sup>。

## 2.2 発話行為論的なアプローチ

続く候補は、発話行為論的なアプローチである。Austin (1962) の着想を受け、Searle (1969, 1975) らによって展開された発話行為論は、文の機能にあたる陳述、質問、要求を、宣言、約束、感謝などとともに発語内行為 (Illokution) と位置づける。発語内行為は、理論的には「文」ではなく、「発話」の種別であり、話し手と聞き手の相互関連性や話し手の意図、適用の方向性 (direction of fit) といった、命題外的な相で互いに区別され、関係づけられる。

このように、文の発話が果たすさまざまな機能が、発語内行為として、文の構造とは別個に体系化されると、文のムードの本質を、発語内行為の体系に求めることが可能になるだろう。すなわち、各構文型には、特定の典型的ないしは原型的な発語内行為が、その解釈として直接、付されるのである<sup>10)</sup>。

一方、文の多機能性について、この枠組みでは Searle (1975) による「間接的な発話行為」(indirekter Sprechakt)、または、それに類した考え方<sup>11)</sup> を援用することになる：文は構文型によって指定された発語内行為を直接、実現するばかりでなく、同時に他の発語内行為をも間接的に実現し得るというものである。

9) 私の知る限り、この枠組みによってドイツ語の文のムードがまとめられたという成果はない。ただし、遂行分析破綻後も、(2-01)や(2-02)のaをbに還元しようとする発想そのものは、姿を変えて生き延びている。例えば、Grewendorf/Zaefferer (1991) がよしとする、「二段階理論 (Zwei-Ebenen-Theorie)」のうちのモデル意味論による試みがそうである。これについては、機会を改めて考察したい。

10) この方向で主要な文のムードを論じたものとしては、Wunderlich (1976) が挙げられる。

11) 例えば Grice (1975) の Conversational Implicature など。

発話行為論的なアプローチは、表現とその意味の多面性を捉える動態的なモデルを提示し得るという点で優れていると言える。例えば、ふたたび(2-02)や(2-03)を参照されたい：

(2-02) a. Waren Sie gestern zu Hause? — Ja/Nein.

b. Ich frage Sie, ob Sie gestern zu Hause waren. — \*Ja/\*Nein.

(2-03) a. Reichen Sie mir bitte das Salz herüber!

b. Können Sie mir mal das Salz (he)rüberreichen?

(2-02)で、意図される質問への回答となる“Ja/Nein.”は、直接、質問を表すaには後続しても、平叙文を用いて間接的にこれを実現するbには繋がらない。また、(2-03)では、要求の意図を疑問文で表すbに“Ja, gern.”という回答が繋がるのは自然であるが、要求文で直接この意図を表すaに、同じ回答を繋げるのは難しいであろう。これは、一口に質問ないし要求といっても、aのように当該の発語内行為が文法的にコード化された疑問文や要求文を用いるのか、そうではないのかにより、聞き手の応対に違いが現れるものとして説明されよう。

反面、発話行為論的なアプローチは、プロトタイプの用法から逸れると同時に、間接性も認め難いといった類の表現に対して、やはり間接性を認めざるを得ない点に弱点を持つ。例えば、(2-04)を見よう：

(2-04) a. Ich warte vor dem Tor.

b. Du trägst einen langen Mantel.

(2-04 a/b)はともに平叙文である。発話行為論的アプローチによれば、その構文型から、陳述の発話であることが直接理解されると考えられるだろう。実際、aは、話し手に当たる人物自身が、発話の時点において、門の前で待っていることを述べる発話、bは、聞き手に当たる人物が長いコートを着用していることを確認する発話であり得る。しかし、適切な条件下では、aは、話し手が門の前で待つことを約束する発話、bは、聞き手に長いコートを着用することを命ずる発話でもあり得る。

この約束や命令の解釈に対し、間接的な発話行為という説明を与えるのは困難である。というのも、ここで平叙文によって直接実現されるとされる陳述は、

話し手が命題内容の实在を請負う発語内行為である一方、間接的に実現されるとされる約束や命令は、それを意図しない発語内行為である。両者は、適用の方向性の点で対極に位置するもので、発語内行為の体系化に際しては、いずれにせよ留意されねばならない基礎的な区別である。<sup>12)</sup> 万一、(2-04) に対し、命題内容の实在を請負うという解釈を一方で与えながら、同時にそれは意図していないという解釈も与えることになれば、論理的矛盾は必至である。確かに、論理的矛盾そのものは、修辭的な効果として、ときに（例えば、修辭疑問の場合など）説明上有用であるかもしれない。しかし、平叙文を用いた約束や命令の表現が極めて日常的で、格別、修辭的な表現とは思われない以上、これを間接的な発話行為によって説明することには無理があると言わざるを得ない。

また、明示的遂行要素を含む文でも困難が生じる。<sup>13)</sup> (2-05) には、a に要求文、b に明示的遂行要素 *Ich bitte Sie ...* を含む平叙文の例が挙げられている：

(2-05)a. Tragen Sie bitte einen langen Mantel!

b. Ich bitte Sie, einen langen Mantel zu tragen.

a, b ともに請願の発話と理解されるが、構造型に応じて文に特定の類の発語内行為の解釈が付与される発話行為論的アプローチでは、b には、a とは異なり、直接には陳述の解釈が付与されることになるだろう。請願の解釈は、明示的遂行要素 *Ich bitte Sie ...* のはたらきを介して、間接的に成り立つものと説明される。

けれども、この説明は不適格である。というのは、陳述で提示される命題内容の真偽を正す “*Stimmt das?*” のような質問は、a ばかりか、b にも後続しない。もし、b は直接には陳述を表すが、その陳述内容から間接的に請願の効力が導き出されるというのなら、直接の発言である当の陳述の真偽が、つまり、本当に請願を行おうとしているのかどうか、確かめられてもよさそうなのである。しかし、これは、要求文による直接的な発話行為の場合同様、許されな

12) Austin (1962) が当初、事実確認的 (constative) な文に対して遂行的 (performative) な文と言って区別しようとしたものも、この区別にほかなるまい。

13) 他に Récanati (1980) なども参照せよ。



いか、許されるとしても、皮肉やあざけりと取られるのである。

発話行為論に基くアプローチは、確かに魅力的な側面を示すものの、文のモードに対しては、必ずしも的確なアプローチとは言えないのである。

### 2.3 意味論的なアプローチ

3番めの候補は、意味論的なアプローチで、Brandt/Reis/Rosengren/Zimmermann (1992) (以下 BRRZ と略記) や IDS などのまとまった成果がある<sup>14)</sup>。このアプローチによれば、文には、直接の解釈として、発語内行為そのものではなく、それ自体ではいかなる発語内行為でもない、極めて抽象的な意味型が付与される。構文型に応じて叙せられる意味型にこそ、文のモードの本質があり、文はこれを介して、発語内行為の体系と切り結ばれる。そのため、(1-02)で示したような、構文型と機能とのプロトタイプの対応関係は、文のモードと発語内行為の体系とが相互に作用して生ずる結果的産物と考えられることになるだろう。また、文の多機能性を説明する場合でも、必ずしも間接的な発話行為という考え方に頼らなくてもよい。2.2で確認したような、往々にして矛盾を伴う再解釈のリスクを負わずに済む。意味論的なアプローチは、他の二者がクリアできなかった問題をクリアし得るという点で、3つのアプローチのうち、理論的にもっとも優れているものと思われる。

とはいえ、問題は、文のモードたる意味型をいかに捉えるかである。平叙文と疑問文のモードを例にとると、BRRZ は、前者は「命題内容にあたる事例が存在する」という演算子の下での命題提示 ( $\exists e (e \text{ INST } p)$ )、後者はそこにさらに「不明だ」という演算子が懸ったかたちでの命題提示 ( $\text{OFFEN } (\exists e (e \text{ INST } p))$ ) と理解している。つまり、平叙文と疑問文のモードの違いは、OFFEN (...) の有無に象徴されるような、命題に対する認識論的な価値の差に他ならないということになる。これに対し IDS は、Lyons (1977: 725ff.) に倣い、ふたつ

14) おそらく Altmann (1993) も、このアプローチに数えられると思われる。もっとも、統語論集に収められたこの論文の記述は、文のモードの構文型に関するものが中心で、彼の言う「機能の型」があまり詳しく説明されていないため、確言はできない。

の文のムードの違いをわけても命題提示の責務 (Verbindlichkeit) の違いに求める。すなわち、平叙文では命題が責任をもって提示されるのに対し(「私は言います」)、疑問文の場合は、それが責任をもって提示されないことが示されるのである(「私は言いません/言えません」)。

BRRZ と IDS は、その発想法において、さほど大きく隔たっているとは思われる。<sup>15)</sup> 双方とも、文のムードの本質を命題処理に費される知の質的違いに見い出しており、この限りで優劣を言うのは困難である。しかし、それでもなお、敢えて断を下すなら、私は IDS のほうが若干優っているのではないかと思う。というのも、Wunderlich (1978) の言う「話法化された発話行為」に用いられる文の意味が、BRRZ の見解ではうまく捉えられないのに対し、IDS の見解では把握可能だからである。

話法化された発話行為とは、具体的には(2-06)のような発話を指す：

(2-06) Darf ich Sie bitten, die Tür zuzumachen?

(2-07) Darf ich den Computer benutzen?

(2-08) Machen Sie bitte die Tür zu!

(2-09) Ich bitte Sie, die Tür zuzumachen.

(2-06) は、援用される文の構造の面で、(2-07) と何ら変わるところがない。ともに、法助動詞 dürfen を用いた疑問文の形式で表されている。にもかかわらず、実現される発話は異なる。(2-07) は、結局はコンピュータの使用許可を求める発話であるにしても、“Ja, bitte.” という回答が自然に後続することから、その如何を尋ねる質問という側面も併せ持っている。これに対し(2-06) は、同じ “Ja, bitte.” による応対をまともには容認せず、むしろこの点では、要求文による(2-08)や明示的遂行要素に導かれた文による(2-09)に近い。つまり、(2-06) は、扉を閉めるようお願いすることを許可してくれるよう請願するのではなく、扉を閉めるようお願いする発話であり、bitten を中心とする主文の要素は、実質的に命題外の要素である。

15) このことは、両者の技術論的相違 (IDS がほとんど試みていない文のムードの形式化を、BRRZ は論理式を駆使して行っている) が目立つだけに、なおさら強調しておきたい。

ここで注目すべきは、Darf ich Sie bitten ...? の役割である。これは、命題内容にあたる出来事の実現を促す点で、要求文において文法的にコード化されているモードや明示的遂行要素 Ich bitte Sie ... に匹敵するものと言える。このうち、Ich bitte Sie ... との関連が、とりわけ興味深い。というのも、Darf ich Sie bitten ...? は、Ich bitte Sie ... に法助動詞の dürfen を加えて疑問文にした格好になっている：「話法化された発話行為」と呼ばれる所以である<sup>16)</sup>。そして、Ich bitte Sie ... の単純な明示の姿勢に対し、Darf ich Sie bitten ...? には対人的に配慮した明示の姿勢が窺える。

こうした体系的関連性を考慮すると、(2-06)での疑問文の意味は、(2-09)での明示的遂行要素を伴う平叙文の意味と関連づけて捉えられねばならないだろう。ところが、平叙文と疑問文のモードの差を演算子 OFFEN (...) の有無に帰す BRRZ の見解では、まさにこれが難しい。

明示的遂行については、BRRZ (61f.) 自ら、Rehbock (1992) の見解に基づき、これを特殊な指示法によると説明している。すなわち、明示的遂行の発話は、平叙文のモードゆえに存在するとされる命題内容の事例が、厳密にその文が発せられる場を指して位置づけられることにより、可能になるというものである。この説明は、それ自体、矛盾を含んではいない。しかし、疑問文で実現される話法化された発話行為には、もはやあてはめることができない。一方では、疑問文のモードゆえに、命題内容の事例が存在するかどうか不明であると言いながら、もう一方で、厳密に文の発せられる場を指して、「ほら、それはここにあります」というのは、明らかに矛盾であるからだ<sup>17)</sup>。

これに対し、IDS の見解では、平叙文と疑問文のモードの違いに命題に対す

16) 話法化された発話行為の表現には、ほかにも Darf ich Sie fragen ...? や Darf ich Ihnen vorschlagen ...? などがあるが、疑問文形式のこれらに対し、平叙文形式の Ich frage Sie ... や Ich schlage Ihnen vor ... は、やはり明示的遂行要素である。なお、平叙文形式のままでも、Ich möchte Sie fragen ... や Ich möchte Ihnen vorschlagen ... のように話法化は可能である。

17) むろん、話法化された発話行為の表現を明示的遂行の表現とは別立てで説明し、それが成功する可能性は残されている。しかし、それでは、先ほど確認した両者の体系的関連性は浮き彫りにされないだろう。

る認識論は関わらない。両者は、命題提示の責務で異なるのみで、平叙文は命題提示が話し手の責任においてなされることを、疑問文はそれがなされ(得)ないことを示す。明示的遂行と話法化された発話行為の効果について、IDS 自らの説明はないが、その見解に従えばともに把握可能であると思われる。つまり、平叙文の Ich bitte Sie ... は、話し手が聞き手にお願いしていることを責任をもって伝えるからこそ、話し手は、この文で聞き手にはっきりお願いが行えるのだし、疑問文の Darf ich Sie bitten ... ? は、話し手が、あたかも許可を受けるような立場にある者として、積極的に「お願いします」とは言わないからこそ、話し手は、この文で聞き手に裁量の余地を認め、配慮の姿勢を示すことができるのである。

以上で、文のムードへの可能な3つのアプローチのうち、意味論的なアプローチがもっとも適切な方法論であることが確認された。このアプローチでは、各構文型から読み取られる文のムードの正体は、すでに述べたとおり、それ自体ではいかなる具体的な機能でもない、極めて抽象的な意味型である。つまり、先に指摘した、構文型と機能とのプロトタイプの対応関係は、文のムードの本質的な属性なのではなく、その付随現象に過ぎないということになる。

ところで、従来の議論では、構文型と機能のプロトタイプの対応関係という、どちらかと言えば直観的な了解に、ともすると無反省に流されることはなかったろうか。それ故に、プロトタイプ性が意識されにくい要求文や願望文<sup>18)</sup>が、絶えず関心の周縁に追い遣られてきたということは考えられないだろうか。

方法論の反省を経たいま、特定の機能との結びつきを想起しにくい構文型にも、文のムードが対応する可能性を、あらかじめ排除することのない方法論を手にすることができた。この成果を活かし、要求文や願望文を検証したい。

18) 平叙文や疑問文は、陳述や質問以外の用法でも頻繁に現れるため、陳述や質問が、平叙文や疑問文の唯一の、ではなく、典型的な用例であることは把握しやすい。これに対し、要求文は、命令や依頼、要請といった要求行為から逸れる用例を、比較的に見つけ出しにくい。また、願望文には、願望表出の機能が想起されるが、願望表出は、感謝や謝罪などと並ぶ態度表出行為の一例に過ぎず、典型的な発話内行為とは見なし難いものである。「プロトタイプ性が意識されにくい」と言うのは、このような意味においてである。

### 3. 要求文のモード

古典的3類型のひとつである要求文の例を問われれば、(3-01)のような文を挙げることにおそらく異論はあるまい：

(3-01) a. Geh (du) morgen hin!

b. Hört mal alle her!/Hört (ihr) alle mal her!

しかし、要求文とは、どんな特徴をもつ文なのかと問われると、答えは容易ではない。例えば、(3-02)～(3-06)に挙げた文は、みな要求文なのだろうか。あるいは、一部がそうなのか。もしそうであれば、どれが要求文なのだろうか：

(3-02) Sprechen Sie bitte lauter!

(3-03) Seien wir doch mal ehrlich!

(3-04) a. Man nehme ein Pfund Mehl.

b. Es sei darauf geachtet, daß ...

(3-05) a. Auf den Rasen wird nicht gegangen.

b. Der Ausweis ist vorzuzeigen.

(3-06) Nicht hinauslehnen!/Keine Reklame einwerfen!/Aufgestanden!

こうした問いに答えるためには、反省が欠かせない。機能的に要求を実現し得るさまざまな文のうち、どれを、要求文というひとつの文法的範疇に収めるのが妥当なのか、考察されねばならない<sup>19)</sup>。そこで、要求文のモードを論ずるにあたり、基本的な点から確認していきたい。もし、(3-02)～(3-06)の中に要求文と見なすべき事例があるのなら、それは典型的な要求文の事例である(3-01)と特徴を共有するはずである。構文型と意味型の相で事例を観察し、そのような特徴があるのかどうか、あるのなら何か、究明したい。

---

19) にもかかわらず、これが本格的に行われるようになったのは、比較的最近になってからである。Fries (1983) や Donhauser (1986) らの先駆的業績に続き、Fries (1992), Rosengren (1993), IDS などが要求文の定式化を試みている。とはいえ、全体として、要求文への関心は、相変わらずあまり高くないのが現状である。

### 3.1 要求文の範囲と構文型

そこで、構文型から見ていこう。(3-01)に挙げた、しばしば親称の命令文とも称せられる文には、3つの独特な現象が伴う：定形動詞の第一位、任意の主語生起、および、動詞の命令法である。

(3-02)～(3-06)に挙げた文のうち、定形動詞第一位は、(3-02)の、いわゆる敬称の命令文と、(3-03)の勧誘文でも認められる。ただし、これらの文が定形動詞第二位で現れることもまったくないわけではないので、定形動詞第一位を必定の現象と断じることはできない：

(3-07) Ehrlich seien Sie ja doch mal!

(3-08) Ehrlich seien wir ja doch mal!

この点は、親称の命令文も同じである：

(3-09)a. Jetzt geh (du) mal zum Arzt!

b. Nun hört mal alle her!

これに対し、(3-04)のいわゆる要請文や、(3-05)の助動詞＋過去分詞または zu 不定詞の文は、定形動詞第二位である。定形動詞第一位への書換えは、要請文の場合はおおむね認められず ((3-10)を参照)、助動詞＋過去分詞/zu 不定詞の場合は疑問文への変質を引き起こす ((3-11)を参照)：

(3-10)a. \*Nehme man ein Pfund Mehl.

b. \*Sei darauf geachtet.

c. Hilfe mir Gott!

(3-11)a. Wird nicht auf den Rasen gegangen?

b. Ist der Ausweis vorzuzeigen?

また、非定形の文(3-06)では、動詞は後置するよりほかに可能性はない。

次いで主語生起の任意性/義務性に関しては、敬称の命令文と勧誘文、および(3-04 a)の要請文で主語生起が義務的である。これは親称の命令文とは正反対の性質である。他方、同じ要請文でも(3-04 b)や助動詞＋過去分詞/zu 不定詞の文に主語は生起しない。ただし、ここには非人称受動が関与していることに注意が必要である。また、非定形の文には、態は関与しないが、それでも主語は

生起しにくい（以下の例は Fries (1983: 11, 25, 27f.) を参照）：

- (3-12) a. Du/Alle aufstehen!  
 b. ?Ihr alle euch waschen!  
 c. Radfahrer rechts halten!  
 d. Nicht betreten!/\*Fußgänger nicht betreten!

最後に、動詞の叙述法に関わる性質だが、(3-02)～(3-06)の中に、明らかに命令法と断言できるものはない。Donhauser (1986: 246ff.) は、敬称の命令文と勧誘文も命令法のパラダイムに含まれるとしているものの、その動詞形態が接統法第 I 式である可能性も即座には否定できない<sup>20)</sup> 反面、明らかに命令法でない事例は容易に指摘できる。非定形の文が命令法でないのは自明であるし、(3-05)で助動詞に現れるのは直説法である。さらに要請文の(3-04)でも、動詞は命令法ではなく（参照：\*Man nimm. . . ），接統法第 I 式であると言えよう。

以上の結果は、表 1 のように整理される：

表 1：要求を表す諸文の構文的性質の分布

	定形動詞 第一位	定形動詞 第二位	命令法	接統法 第 I 式	主語生起の 義務性	非人称受動 の可能性
親称の命令文	+	+	+	—	—	—
敬称の命令文	+	+	?	?	+	—
勧誘文	+	+	?	?	+	—
要請文	—	+	—	+	+ / — <sup>(2)</sup>	+
助動詞+過去分詞・zu 不定詞の文	+ <sup>(1)</sup>	+	—	—	—	+
非定形の文	—	—	—	—	—	—

注：(1) ただし、疑問文への変質を伴う (2) + / — は態による

明らかなのは、まず、すべての点において否定的な値を示す非定形の文の異質性である。Fries (1983: 60ff.) の主張するとおり、構造上、これは親称の命令文と同一の範疇に収めるわけにはいくまい。また、助動詞+過去分詞/zu 不定詞の文も、直説法で現れ、定形動詞第一位の際には疑問文に変質することから、通常の平叙文であり、要求文には属しないと見られるだろう。残るは、親称の命令文のほか、敬称の命令文と勧誘文、そして要請文である。

20) 例えば Erben (1964: 75ff.) は、これらを接統法現在（第 I 式）であると見ている。

このうち、敬称の命令文と勧誘文が、動詞の配置や態の性質を親称の命令文と共有することは明白である。また、動詞の叙述法も命令法である可能性が高い。敬称の命令文と勧誘文を親称の命令文とともにひとつの範疇に収めるのは妥当であると思われる。実際、3者を合わせて「命令文 (Imperativsatz)」と呼ぶことは、Donhauser (1986) 以降、定着した観がある。そこで、私も以下、この用語法に従うことにしたい。ただし、それでも要請文の帰属の問題は残る：要請文は、本当に、命令文と共通の文のモードには属さないのだろうか。

大方の目に要請文は、どうやら、命令文とは別のモードと映るらしい。<sup>21)</sup> 確かに、表1を見る限り、要請文には親称の命令文と共通する性質など、ないに等しい。また、敬称の命令文や勧誘文とも、共通する点は僅かである。反面、要請文はこれら2者とは、少なくとも主語の振舞いが共通である：要請文でも、敬称の命令文や勧誘文でも、動詞が能動態である限り、主語は必ず生起する。ちなみに、通常、主語の生起しない親称の命令文でも、主語の生起は不可能ではない ((3-01/09) 参照)。加えて、動詞の叙述法の点でも、要請文が接続法第I式を敬称の命令文や勧誘文と共有している可能性も棄て切れない。

こうして見ると、要請文は、敬称の命令文や勧誘文を介し、親称の命令文にまで緩やかに連なっているのが実態であるように思える。果して、命令文と要請文の連続より両者の断絶のほうを優先して捉える正当な理由はあるのだろうか。管見では、そのような理由はない。というのも、一連の命令文に共通する動詞の配置と活用に関わる性質は、他の種類の文（他のモードの文やモードを持たないと思われる文）とは異なる、命令文独特の構造的性格を、本質において特徴づけるものではないからだ。

例えば Fries (1992) や Rosengren (1993) は、命令文の構文上の特徴を、定形動詞の配置から推し量っている。<sup>22)</sup> ことに Fries は、命令文では、定形動詞第一

21) 注19で挙げた文献は、みなこの線上にある。一方、平叙文の範囲を限定しようとする Oppenrieder (1987: 172ff.) の目には、要請文はむしろ命令文に近いと映っている。

22) Xバー的図式により、構文を定形動詞の素性 I の投射と捉える際、両者とも、平叙文が最大投射の IP であるのに対し、要求文は中間投射の I' であろうとの見解を示している。



位の形式が通常で、定形動詞第二位はむしろ稀であることに着目し、わけでも虚辞 *es* が許されないことに注意を喚起する：

(3-13) a. \**Es* sieh her !

b. <sup>?</sup>*Es* sieh keiner her (Fries (1992 : 169))

(3-14) a. *Es* wurde dort getanzt.

b. Wurde (\**es*) dort getanzt ?

c. Ich wußte nicht, daß (\**es*) dort getanzt wurde.

虚辞の *es* は、(3-14) の対比が示すとおり、平叙文の中でも第二位に配置された定形動詞の前にしか立つことができない。このことから、虚辞 *es* を許さない命令文には、平叙文のような構造化された前域が欠けるということが導出される。すると、命令文が無標で定形動詞第一位の形式をとることには、自ずと説明がつくし、定形動詞第二位がむしろ稀であることも、付加という有標の過程に帰されることになる。そして、もし、この論法を推し進めるなら、虚辞 *es* を許す要請文は命令文とは異なる範疇に属するとの結論に至るだろう。

確かに、Fries の洗練された説明によれば、命令文の構文を、平叙文との対比においては十分把握できる。しかし、前域が欠けるという構文の特徴は、決して命令文だけに固有のものではない。例えば、決定疑問文も前域を欠く。あるいは、*zu* 不定詞文も、間接の平叙文や決定疑問文にはなれるのに、*w* 語句を要する補足疑問文にはなれないことから、やはり前域を欠くものと思われる：<sup>23)</sup>

(3-15) a. Sie behauptete, daß sie mich kenne/mich zu kennen.

b. Er stellte mir frei, ob ich mitkommen würde/mitzukommen.

c. Ich wußte nicht, wen ich fragen sollte/\*wen zu fragen.

さらに、*zu* 不定詞文のほうは、決定疑問文とは異なり、前域を欠くばかりか、非人称受動を容認しないという点でも、命令文と共通する：

(3-16) a. Werden die Studenten gut betreut ?

b. Wird heute getanzt ?

23) この件については、Haider (1991 : 123) も参照せよ。

(3-17)a. Geliebt zu werden ist schön.

b. \*Gelacht zu werden ist schlecht.

こうして、命令文のほかにも、前域を欠くと思われる、決定疑問文やzu不定詞文をも考慮に入れると、前域の欠如は、命令文に固有の性格でないばかりか、非人称受動の不可能性から導出可能な、一般的な現象であることが分かる。つまり、Fries や Rosengren が命令文の構造上の特徴と見なした前域の欠如は、実は、そこからさらに還元を進めることができる性質なのである。定形動詞の配置の特色に鑑みるだけでは、命令文の構文的本質を捉えたことにはならず、これで命令文と要請文の断絶が十分に正当化されるわけではないのである。

他方、別の観点では、Donhauser (1986: 246ff.) が、命令法により、命令文と要請文は隔てられるだろうとの立場を仄めかしている。彼女は、動詞の形態上の曖昧さにもかかわらず、敬称の命令文と勧誘文までは、動詞の活用範疇が命令法に属すると見なす。その根拠は、(3-18)のような例から窺い知れる動詞の一致の特徴に求められると言う：

(3-18)a. *Nimm* (**du**) dir/\*sich ein Stück Kuchen!

b. *Nimm* \*dir/sich **jeder** ein Stück Kuchen!

c. *Nimmt* euch alle ein Stück Kuchen!

(3-18 a/b)の再帰代名詞の分布が端的に示すとおり、親称の命令文には、必ずしも表層に現れない2人称の主語ほか、3人称の主語も可能である。けれども、この人称の違いに、動詞は呼応しない：(3-18 c)のように主語が複数とならない限り、動詞の形態はnimmのままである。すなわち、親称の命令文において、動詞は主語の数に応じては活用するが、人称によっては活用しない。

この状況は、敬称の命令文と勧誘文に目を向けても、基本的に同じである：

(3-19)a. *Stellen* **Sie** sich mal vor, Sie würden Ihr ganzes Vermögen verlieren.

b. *Stellen* **wir** uns mal vor, wir würden unser ganzes Vermögen verlieren.

c. *Stell* (**du**) dir mal vor, du würdest dein ganzes Vermögen verlieren.

(3-19)のaとbで主語の人称がSieとwirのように異なっても、動詞は形態を変えない。両文は、親称の命令文cと対照してはじめて、動詞の形態に変化を

示すが、これとて主語の人称というよりは、対人距離 (Distanz) の違いに応じていると見られる。以上から、Donhauser は、親称と敬称の命令文および勧誘文に現れる動詞を、人称による一致の特徴を持たない命令法と認定するのである。

確かに、この、動詞の活用に関わる結論そのものは、正しいと思われる。しかし、それが即、命令文を構造上、要請文から隔てることを正当化するわけではない。実態は、むしろ逆で、命令文が、主語と動詞の人称による一致を行わないことに特徴があるのなら、要請文にもまた、同じ特徴が認められる。

すでに確認したとおり、要請文に用いられる動詞の叙述法は接続法第 I 式である。この叙述法自体は、3 人称のほか、2 人称の語形も有するが ((3-20) 参照)、要請文で用いられるのは 3 人称の語形に限定される ((3-21) 参照) :

(3-20) Er hatte mir gesagt, daß **du** krank *seist*/daß **er** krank *sei*.

(3-21) a. \***Du** *nehm(e)st* Salz.

b. **Man** *nehme* ein Pfund Mehl.

しかも、この 3 人称の語形は、主語との人称の一致によってもたらされるのではない。というのも、要請文の主語は、もっぱら *man* である。これは、談話上、*er* のような人称代名詞によって受けることのできない不定代名詞であり、人称を示すとは言い難い。むしろ、ここで動詞の活用形に 3 人称の語形が選ばれるのは、平叙文でも、たまたま非人称の述語が生起する際に機能する、デフォルト的活用規則に基づくためであろう。主語が人称の特徴を欠く場合、定形動詞は 3 人称の形態をとるが (例: *es regnet*, *mir graut (es) davor*, *es waren Ausländer* など)<sup>24)</sup> 同じ規則が要請文にも適用されると考えられる。従って、要請文では、受動化に際して、非人称受動しか認められないのである: <sup>25)</sup>

(3-22) a. \***Du** *seist* gefragt.

b. \***Paul und Gerda** *seien* gleich untersucht.

c. **Es** *seien* noch zwei Beispiele genannt.

24) ただし、単数・複数の区別は可能で、場合によっては必要でもある。

25) もっとも、人称受動が成句で常套化している場合はある: (例) *Gegrüßt seist du, Maria*.

d. *Es sei* auf folgende Faktoren hingewiesen: ...

以上の議論をまとめると、表1で極めて対照的な分布を示していた、命令文と要請文の一連の構文上の性質は、実は、人称的一致の禁止という、平叙文や疑問文には決して当てはまらない特徴の下に一括される。両者は、この共通の特徴の下での下位区分であり、その違いは主語の質に由来する：命令文は、外向的指示が可能な主語を持ち、これを命令法を通じて動詞パラダイムに構造化させる一方、要請文は、統語的主語を指示力のない要素に限り、シンタグマに構造化している。そこで、主語の存在が動詞の活用に深く浸透した命令文では、態を変更する場合でも、主語が必須のため、非人称受動は認められない<sup>26)</sup> 非人称受動が可能ではないのだから、前域が構造化されることもない。一方、要請文では、主語が不定のものに限られる。自ずと定と見なされる人称的主語を生み出す受動態は受け付けられないことになり、代わりに、非人称受動が文法化される。その結果、前域の構造化が可能になるのである。

### 3.2 要求文の意味型

これで、命令文と要請文の示す構文が、人称的一致を抑える構造として、ひとつの型に集約されることが判明した。しかし、両文を合わせてひとつの文のムードをなすとするには、構文型の存在に加え、他のムードとは異なる一定の意味型が示されねばならない。しかし、まさにこの点で困難が生じる。

2.3で採用したような、命題提示の責務（「私は言います/言いません」）を重視して文のムードを記述する枠組みでは、命令文でも、要請文でも、話し手がこの責務を積極的に負うことが示されるだろう（つまり、「私は言います」）。

他方、すでに Haftka (1984) や Rosengren (1993), Wunderlich (1984) などで触れられているとおり、命令文は、主語の指示対象が発話時の聞き手の集合に属するという点で、意味論的に際立つものでもある。命令文の主語は、仮に

26) 目的語から主語を派生させる受動態は、ときに可能である：

(例) Werde du mal von allen allein gelassen, dann wirst du sehen ... (Rosengren (1993: 11))

不定の要素の場合でも、少なくとも聞き手のうちのひとりであるという程度には、特定化されている((3-23)参照)。これに対し、要請文の主語は、常に不定であるが、これが聞き手の集合に含まれるのかどうか、文脈を離れて判断することはできない((3-24)参照)：

(3-23)     Mach (*du/einer*) die Tür zu!

(3-24)     *Man* beachte, ...

このことは、命令文のほうが要請文より多くの特徴を有することを示唆する。

そこで、命令文と要請文の違いを再現すべく、前者には、特定の聞き手との対峙を示す「私は君に言います」の特徴を、後者には、その点が特定されない「私は言います」の特徴を付与しよう。すると、あとは、例えば主語・動詞の結合に関連させるなどして、命題を形式的に  $\exists x f(x)$  で示されるもの(だれかに  $f$  の役割がある)に指定すれば、命令文の意味論は、ひとまず「私は君に、だれかに  $f$  の役割があると言います」として再現できるかもしれない。

しかし、要請文に関しては、重大な問題が生じる：この方法で行けば、要請文の意味は「私は、だれかに  $f$  の役割があると言います」となるはずだが、これでは、平叙文にたまたま存在量化詞を含む命題が来た場合と違いがない。つまり、*Man nehme* ein Pfund Mehl と *Man nimmt* ein Pfund Mehl は、同義ということになってしまう。もとより、これが誤った解釈であることは明白である。上述の意味論には、何らかの欠陥を認めざるを得ない。

これは、提示される命題の類型が十分に区別されていないことによると思われる。直観的に言って、平叙文で提示される命題が事象の実在性を問題にする「 $p$ である」型であるのとは異なり、要求文で提示される命題は事象の実在を期待する「 $p$ であれ」型のものである。事象の実在を命題内容として共有しながらも、両文の提示する命題は典型的に異なる。IDS (618ff.) 流に言えば、「 $p$ である」型の前者は表象的知識(repräsentatives Wissen)で、「 $p$ であれ」型の後者は適合的知識(Erfüllungswissen)で理解される命題である。<sup>27)</sup>

27) 他には、Rosengren (1993: 20ff.) が、後者に様相論理学という必然の演算子が付いた命題を想定している。

すると、平叙文が表象型の命題を積極的に提示する文である一方、要求文は、適合型の命題を積極的に提示する文であると考えられる。そして、その提示が明白に聞き手に向けられるのかどうかで、命令文と要請文が分かれる。つまり、要求文のうち、命令文は「私は君に $p$ であれと言います」を、要請文は「私は $p$ であれと言います」を意味型とすると考えられるだろう。

ところで、表象的知識であれ、適合的知識であれ、その根底には、事象が実在として認識されるという関係がある。直観の範囲で言えば、認識される事象は実在もする。いま $p$ は、こうした、事象の直観的実在性を示すと考えよう。

このとき、表象的知識で理解される命題とは、いったいどんな形式をしているのか。ここでは、事象の実在性が問題なのだから、その命題の形式は $p$ だと言えらるだろう。否である。というのも、 $p$ は、いま述べたとおり、直観の範囲に留まる実在性である一方、伝達で理解される命題は、自ずとその範囲を越えるからである。表象型の命題は、事象の直観そのものを表すのではない。これにもう一段の手が加わっている。そこには、世界観の投影があるだろう。

もとより、個々人の多様な世界観が問題なのではない。ここで言う世界観とは、そうした多様性が多様性として存在できる基盤にあるような、普遍的な世界観、すなわち、個々には意見が異なる我々も絶えず共有するような暗黙の合意のことである。それはおそらく、次のようなものではないだろうか：つまり、ある事象が認識されるとき、その事象は実在が可能であり、認識される事象でありながら、実在不可能であることは考えられないという信念である。

そこで、この信念が、件の世界観として、平叙文の提示によって命題が表される際に映し出されると考えよう。このとき、事象の実在の可能性を  $\text{poss } p$  で示せば、この信念は $p$ と  $\text{poss } p$  の含意関係として、 $p \supset \text{poss } p$  で示せることになる。これが平叙文の提示する命題の形式なのである。

この命題が、その形式上、 $\text{poss } p$  が誤りでない限り、 $p$  の真偽にかかわらず正しい命題であることに注意されたい。平叙文に認められる、命題の積極的提示の責務に関連して、もし、正しい命題を提示する限り、この責務は果たされ则认为るならば、平叙文は、可能な（つまり、我々が想像し得るだけの） $p$

に言及する限り、 $p$ が本当に実在するかどうかにかかわらず、意味論的な適格性を保てるということになる。これは、我々の言語的経験に符合するものであろう：現実には実在しない事象（例えば、Er sieht zwei Sonnen）を命題化したからといって、平叙文は、即その理由で不適格な表現とはならない。

他方、要求文によって提示される、適合型の命題はどうか。これは、同じく直観的に認識される事象  $P$  が、発言時には実在でないが、いずれ可能なものであるとの見方を表すと考えられる。これは、 $\neg p \wedge \text{poss } p$  の形式で示されるだろう。ただし、この命題は、先の普遍的世界観を前提に評価されねばならない。というのも、この世界観に反するような事象は望みようにも望めないからである。すると、 $\neg p \wedge \text{poss } p$  という適合型の命題は、実質的には、(3-25)に示した3とおりで真偽の判断がなされるものと考えられる：

- (3-25) a.  $p$  は現に実在するし可能である場合：偽
- b.  $p$  は現に実在はしないが可能である場合：真
- c.  $p$  は現に実在しないし不可能である場合：偽

ところで、要求文も、平叙文同様「私は（君に）言います」という積極的な命題提示の責務を負う。よって、 $\neg p \wedge \text{poss } p$  という命題は真でなければならぬまい。そこで、要求文は、(3-25 b) の場合は意味論的に適格であるが、(3-25 a/c) の場合には適格性が低いものと予想される。これは次の例で検証されるだろう：

- (3-26) a. \*Hab heute Geburtstag!
- b. Mach die Tür zu!
- c. ?Sei ein Baby!

(3-26)において、bの「聞き手にあたる人物が扉を開ける」という事象は、仮に発言時、現に実在はしなくとも、実現可能であるため、要求文による表現は何ら問題がない。これに対し、aのように「聞き手にあたる人物が特定の日の生まれである」ことは、発言時に必ず実在する事象で、むろん可能なことでもあるため、この命題内容をもとに要求文を形成すると、重大な不適格性が生じてしまう。また、「聞き手が赤ん坊である」ことを命題内容とするcも、予想どおり適格性が低い。通常、話し掛けられる人物は、ある程度成長した人間で

ある以上、この事象は、発言時にはまず実在せず、また一旦成長した人間が、ふたたび赤ん坊に戻る可能性も、一般的に考えにくいためである。<sup>28)</sup>

このように、文の提示する命題に表象型と適合型のふたつの類型を想定し、そのうち適合型のものが提示されるところに要求文の特徴を見い出すと、平叙文と一線を画す、要求文の意味論は適切に把握できる。そこで、要求文の意味型として、命令文には「私は君に*力*であれと言います」、要請文には「私は*力*であれと言います」が対応すると判断してよいだろう。

さらに、この意味論は、要求文の多機能性を捉えることも可能である。要求文もまた、要求を表すほかに、さまざまな用法を有するが、代表的な例として、次を参照されたい：

(3-27)a. Schäm dich!

b. Hol dich der Teufel!

(3-28) Mein Name sei Gantenbein.

(3-29)a. Geh (du) mal rüber, dann siehst du ihn sofort. (Rosengren (1993: 31))

b. Mach eine Bewegung, und ich drücke los. (Donhauser (1986: 174))

c. Lies es oder du wirst die Prüfung nicht bestehen.

(3-27 a/b)は「恥を知れ」や「どうにでもしろ」というような意味で、非難や無関心といった態度の表明となっている。また、(3-28)は「私の名前はガンテンバインということにしよう」という仮定であるし、(3-29)は、いわゆる条件法的命令文の例である。いずれも、命題内容にあたる事象を実在性と可能性の二面で評価することから導き出せる用法であると言える。

ことに(3-27 b)は、主語がder Teufelのような超越的存在であり、現実世界の一員ではないことに注意されたい。「超越的存在が君を迎える」という命題内容は、常識の範囲では、決して実在しない。しかし、(3-27)のような要請文は「私は言います」という、提示の責務を積極的に負う発言なので、命題(*力*で

28) しかし逆の言い方をすれば、その可能性が考えられる範囲では、cとて、可能ということになる。例えば、架空の想定として、次のように言うことは許される(後述の本文も参照)：  
(例) Sei ein Baby, und du wirst/würdest so viel schlafen, wie du willst.



はなく、 $\neg p \wedge \text{poss } p$  であることに注意)には正しさが求められる。(3-25)の真理条件に鑑みて、「超越的存在が君を迎える」可能性を容認せざるを得ない。この実在し得ないことの容認が、無関心の態度の表れとなるのである。

### 3.3 まとめ

要求文に関する考察は、次のようにまとめられる：要求文のモードには、命令文だけでなく、いわゆる要請文も含まれる。両者は、主語・動詞間の人称的一致の抑制（ただし、数の一致は可能）という特徴を有する独自の構文型に立脚しており、主語の定・不定性に応じて下位区分される。一方、意味論的には、提示される命題の形式が、適合的知識によって理解されるべき  $\neg p \wedge \text{poss } p$  であるという特徴を有する。この形式の命題が、命令文では「私は君に言います」と特定の聞き手に身に向けた提示法に、要請文ではこの指定のない「私は言います」の提示法に結びつく。また、適合型の命題が非実在性と可能性の連言のかたちをとることから、要求文で命題をなし得る事象は、平叙文に比べて限られる。さらに、同じ理由から、要求文には、要求のほかにも、態度表明や仮定の表現、あるいは条件法的命令文などの用法が可能になるのである。

## 4. 願望文のモード

願望文とは、具体例で示せば、(4-01)に挙げるような文のことである：

(4-01)a. Käme er doch endlich mal!

b. Wenn er doch endlich mal käme!

これらに文のモードの資格があることは、ようやく近年 Heidolph/Flämig/Motsch (1981: 765ff.) や Scholz (1991) によって明確に表明されるようになった。その反面、これを批判する立場も、依然として根強い（例えば Rosengren (1993: 35ff.))。

そこで、まず、いわゆる願望文を構文と意味の両面で検討し、どちらの立場により説得力があるのか、見極めたい。その後、これまで願望文を文のモード

と見なすのがためらわれてきたわけが、どう説明されるのか、考えてみる。

#### 4.1 願望文という文のムードはあるのか

(4-01)のような文について、Scholz (1991) は、そこに独自の構文型が認められ、一定の命題外的な意味論・語用論が対応することを、多くの事例によって丹念に示している。彼女は、定形動詞第一位または wenn に導かれる定形動詞後置、義務的な接続法第II式、および、ごく限られた種類の心態詞 (doch, bloß, nur など) の3点を総合して、願望文独自の構文型と見なしている。

このうち、接続詞と動詞の配置上の特色は、条件文のそれと共通する。この点には、従来からも注意は払われてきた。ただし、それは大抵、願望文は帰結文が省略されて残った条件文であるという見解に直結していた。例えば(4-01)は、(4-02)の下線部分が省略されたものというわけである：

(4-02) a. Käme er, (dann) wäre es gut/würde ich mich freuen/...

b. Wenn er käme, (dann) wäre es gut/würde ich mich freuen/...

しかし、姿がいくら条件文と似ているとはいっても、省略の論法では願望文の構文的特色を的確に説明できない：

(4-03) a. \*Käme er *doch endlich mal*, dann wäre es gut.

b. \*Wenn er *doch endlich mal* käme, dann wäre es gut.

(4-04) a. Käme er *tatsächlich/wirklich*, dann wäre es gut.

b. Wenn er *tatsächlich/wirklich* käme, dann wäre es gut.

(4-05) a. \*Käme er doch *tatsächlich/wirklich*!

b. \*Wenn er doch *tatsächlich/wirklich* käme!

(4-06) *Ein Vöglein* wenn ich wär, flög ich zu dir. (Oppenrieder (1991: 229))

(4-07) \**Ein Vöglein* wenn ich doch wär(e)!

(4-08) a. Käme er, dann wäre es peinlich.

b. Wenn er käme, dann wäre es peinlich.

例えば、条件文には生起しない *doch endlich mal* のような心態詞類はどこから来るのか((4-03)参照)。逆に、条件文には可能な *tatsächlich* や *wirklich* といっ

た副詞規定が、願望文に受入れられないのはなぜか ((4-04)と(4-05)を対比せよ)。条件文では可能な、文肢の前方への取り出しが願望文で不可能なのはなぜか ((4-06)と(4-07)を対比せよ)<sup>29)</sup> どんな帰結文でも省略可能というのではないわけだが((4-01)は、(4-08)には断じて関連づけられない)、省略可能な帰結文は、いったい、どう限定されるのか—こうした問いに首尾一貫して答えを出すことは、ほとんど不可能であるように思われる。Scholz (1991: 5ff.) も指摘するとおり、省略以前の原文が恣意的にしか再建できない以上、帰結文の省略された条件文として、願望文の構造を説明するわけにはいかない。願望文は、その見掛けにもかかわらず、条件文のような副文ではない、れっきとした主文である。ここに、独自の構文型を認める必要があると言える<sup>30)</sup>

ところが、Scholz (1991) 以降も、願望文を条件文に還元しようとする試みは続いている。例えば Rosengren (1993) がそうである。もはや、帰結文の省略という論法こそ取らないものの、彼女は、願望文は、条件文という、それだけでは未完結の文が、敢えて自立的に用いられる結果に過ぎず、文のモードには値しないと主張する。その論拠として、次のような例<sup>31)</sup> を提示している：

(4-09) Ach, wäre ich zu Hause geblieben !

(4-10) Wenn Peter das doch bloß nicht wieder tut !

(4-11) Wer [doch] so blaue Augen hätte !

(4-12) Daß ich mir auch mal so etwas leisten könnte !

(4-01)の願望文とは異なり、(4-09)には、特徴的とされる心態詞 *doch*, *bloß*, *nur* などが欠け、(4-10)には、接続法第II式ではなく直説法が用いられている。

29) (4-06)の例は、確かにメルヘン的な、特殊な文体かもしれない。しかし、ここで重要なのは、仮に同じ文体に留まっても、(4-07)が願望文として通用しないということである。

30) 帰結文の省略による願望文の把握が遂行分析と問題を共有することにも注意。疑問文や要求文が、従属構造の主文に相当する明示的遂行要素の *Ich frage Sie ...* や *Ich fordere Sie auf ...* が削除されて成立するのではないように、願望文も帰結の主文が省略された結果ではない。

31) Rosengren (1993: 35ff.) を参照せよ。このうち(4-11)は、彼女自身、Scholz (1991: 108) から引いたものであることを断っている。ちなみに、この例は、ライネルト氏によると、文脈を抜きにしては、解釈できないとのことである。この点、(4-01)のような願望文が文脈を捨象しても、解釈になんら支障を来さないのとは対照的である。

また、(4-11)や(4-12)は、条件文の形式ではなく、自由な関係文ないし *daß* 文の形式を取っている。いずれの文形式も、通常は副文に用いられるもので、それだけでは完結した文の体をなしていないという点で共通する：Scholz (1991)の言う願望文ばかりでなく、その要件を満たさない、他の、形式的には未完結の文も、自立的に用いられると、願望やそれに類した態度を表し得るのである。

そこで Rosengren は、こうした表現のうち、願望文だけに文のムードの資格を与え、これを特別扱いするのは適当ではないとする。通常の完結した文が知や意に照らして理解されるのとは異なり、これらの表現はいずれも、その形式的未完結性ゆえに情に訴える効果をもつのだとして、未完結文の自立的用法を一括して捉えようとする。

しかし、(4-01)に挙げたような願望文の意味論は、本当に(4-09)～(4-12)の表現と同列に、その未完結性ゆえの情への訴えかけということで説明がつくのだろうか：否である。というのも、願望文で理解される内容には、その他の未完結文の自立的用法には見られない、ある特徴が認められるからである：

(4-13)a. \**Käme* ich doch gern mit !

b. \*Wenn ich doch gern mit*käme* !

(4-14)a. <sup>??</sup>Wenn ich doch nach Osaka *ginge/gehen würde* !

b. Wenn ich doch nach Osaka *gehen könnte/dürfte/gegangen wäre* !

(4-15) Ach, *käme* ich gern mit !

(4-16) <sup>??</sup>Wenn ich doch nach Osaka *gehe* !

(4-17)a. Was ich *kaufen würde/müßte* !

b. Was ich dem *gäbe/geben müßte* !

c. Wen ich *unterrichten würde/müßte* !

(4-18) Daß ich auch mal nach Osaka *gehen würde/könnte* !

(4-19) Wenn ich nach Osaka *ginge/gehen würde*, würde sie sich einsam fühlen.

(4-13)と(4-14)が示すように、願望文は、法助動詞を伴わない環境において、行為動詞を無標の時制・態で用いる限り、その動作主に1人称を当てるような配役を許さない。これに対し、(4-15)～(4-18)を見ると、Rosengrenの言う未

完結文の自立的用法には、そうした制限が妥当しない<sup>32)</sup> また、通常の接続法第 II 式による条件文にも、同様の制限は見られない ((4-19) 参照)。

仮に Rosengren の仮説が正しいのであれば、もし願望文に何か特異な性格 (ここでは、1 人称主語の制限) が認められた場合、それは、未完結文の自立的用法に由来するか、さもなくば、願望文の雛型である非現実の条件文自体にもともと備わっていた性質か、いずれかのはずである。しかし、(4-13)～(4-19) の対比が示すとおり、実際には、そのどちらにも原因は求められない。しかも、ここで見い出される願望文の性格とは、1 人称主語の扱い、つまり、話し手自身を発言時に可能な動作主の範疇に含めるのか、含めないのかという、自己認識過程の表れである。これが情ばかりか、知や意とも密接に関連することは言を俟たない：説明不能の理由を、人間心理の情の面がなお未解明であることに帰すわけにもいくまい。Rosengren の仮説は、興味深くはあっても、説得力に欠けると言わざるを得ない。

以上で、Scholz (1991) の挙げる 3 つの特徴をもって、ひとつの構文型と見なせることが判明した。すると今度は、これに一定の意味型が対応するのかどうか、確かめられねばならない。手掛りとして、構文型の存在を支持する根拠となった人称制限に再び注目しよう。実は、同じ現象は要求文にも見られる：

(4-20) a. \*Komme ich nur pünktlich an!

b. \*Ich sei Gantenbein.

これは、ひとつには要求文の主語の性格によるものと説明できる。主語の外向的指示力を活用を通じてパラダイムに潜在させている命令文は、話し手自らを指す 1 人称を主語に迎えることができないし、不定の主語に限って主語を許す要請文でも、必然的に定的表現である 1 人称は排除されざるを得ない。

他方、この制限は、要求文の意味型にその根があるものとも考えられる。例えば (4-20 a) を例に説明すれば、(3-25) に示した、適合型命題の真理条件から、

32) (4-14 a) と (4-16) の容認性判断は確かに微妙である。とはいえ、ライネルト氏によれば、もし、これを可能と見なすのなら、doch への強勢は欠かせないという。doch の強勢は、(4-01) のような典型的な願望文では許されないものである。つまり、これらの例が仮に可能だとすれば、それは、まさにそれらが願望文でないことによるのである。

この要求文が意味論的に適格であるのは、「私が定刻に着く」ことが現に実在はしないが、その可能性は存するときということになる。けれども、ここで問題の事象は、話し手自らが行う行為である。話し手に自己同一性のある限り、この行為が可能であるというのは、それが実在するに等しい。このため、(4-20 a)を意味論的に適格にする唯一の条件も適わないことになる：「私は定刻に着けるが、定刻に着かない」は、「私は私ではありません」がナンセンスである限り、真たり得ない。よって、(4-20 a)は不適格とならざるを得ないのである。

このように、1人称主語の制限は、要求文独特の構文型に由来するものとも、適合型命題の真理条件と話し手の自己同一性の相互作用に由来するものとも説明がつくだろう。けれども、ドイツ語の要求文の構文型が個別言語の事例であるのに対し、話し手の自己同一性のほうは、(もし、Bühler (1982) の言うとおり、原点たる話し手の存在位置が、言語が言語として機能する限り与えられ続けるのだとすれば) 言語の別を問わず妥当する普遍的条件であると言える。とすれば、いま要求文だけでなく、願望文においても、1人称主語の制限が確認されたのは、偶然ではなく、むしろ必然と考えられよう。これは、適合型命題と話し手の自己同一性の相互作用に由来する。つまり、願望文の命題は、要求文同様、適合型の形式をとるのである。

すると、残る問題は願望文の命題提示の責務である。思うに、「私は言います」と積極的な提示法の要求文に対し、こうした積極的な提示法に命題を載せようにも載せられないというのが、願望文ではないだろうか。つまり、「私は、*力*であれと言えません」が、願望文に付与される意味型であると思われる。

ここで重要なのは、命題提示の責務が「私は言いません」ではなく、「私は言えませんが」と話法化されているということである。もし「私は言いません」なら、「彼が来る」をもとに得られる「私は、彼よ来たれと言いません」の意味は、(4-01)にではなく、(4-21)に挙げたような文に与えられるべきである：

(4-21) Er braucht/sollte nicht kommen.

また、「私は言えませんが」と、命題提示の責務が話法化によって婉曲化されるからこそ、要求文では言いにくかった命題も、願望文では問題なく表すことが

できる。例えば、先に(3-26)で挙げた要求文と以下の願望文を対比しよう：

(4-22) a. Wenn du doch heute Geburtstag hättest !

b. Wenn du nur die Tür zumachen würdest !

c. Wenn du doch ein Baby wärst !

(3-26)の要求文では、a や c で意味論的に不適格な表現が生じた。a と c の適合型命題は、発言時に満たされる可能性がまずないため、積極的な命題提示には結びつけられないのであった。しかし、それに対応する願望文(4-22)では、a も c も、b 同様、適格である。願望文が、話法化された、極めて消極的な命題提示によって特徴づけられるためである。

あるいは、過去に位置するゆえ、現には実在し得ず、また、今後も同一のものが生起する可能性のない事象をもとにした適合型の命題は、要求文に取り込むのは極めて困難であるが、願望文で表すのならまったく問題は生じない：

(4-23) a. \*Hab gut geschlafen !

b. Hab (du) mal so schlecht geschlafen wie ich, und du wirst auch klagen.

(Rosengren (1993 : 31))

(4-24) a. Hätten Sie es doch nur nicht gewußt !

b. Wenn du doch gelaufen wärst !

これも、(4-22)の場合と同断である。

ちなみに、当該の命題(単純な  $p$  ではなく、適合型の  $\neg p \wedge \text{poss } p$  形式であることに注意)が、発言時に正しいであろう(4-22 b)は、いわゆる現実(Realis)の願望を、反対に、誤りである、ないし、あろう(4-22 a/c)や(4-24 a/b)は非現実(Irrealis)の願望を表す公算が高いと予測できる。この予測が実際、正しいことは、それぞれの例で確認されたい。

これで、先に確かめた構文型に一定の意味型が対応していることが判明した。願望文という文のモードの存在が確かめられたのである。願望文の構文型は、定形動詞第一位または wenn に導かれる定形動詞後置、義務的な接続法第II式と doch, bloß, nur など特定の心態詞の総合によって特徴づけられる。一方、その意味型は、要求文同様の、適合的知識で理解される命題が、「私は言えませ

ん」という、話法化された、消極的な命題提示と組合わせられるところにある。この消極的な命題提示ゆえに、願望文は、要求文では言い難かった命題も問題なく提示できる。また、適合型命題の真偽に応じ、現実的願望と非現実的願望の違いが生じる結果にも繋がるのである。

#### 4.2 願望文の周縁性

ところで、冒頭でも述べたとおり、願望文は永らく、文のモードとして正当な扱いを受けて来なかった。おそらく、その理由は、何らかの意味で、願望文が周縁的な性質を示すためであろう。ひとつには、平叙文、疑問文、要求文の3つに比べ、願望文には、主観性が際立って強く感じられることがある。また、世界の諸言語に目を向けたとき、願望文らしきモードが文のモードとして確立されている言語が、ごく限られているということもあるだろう<sup>33)</sup>。そこで、本節の最後は、こうした願望文の周縁性を論じてみたい。

先ほど、願望文の意味型を記すのに「私は言えません」という、話法化された要素を導入したが、この措置は、即座にある疑念を呼び起こすかもしれない：近年、文のモードの議論の中で焦点となったのが、わけても、話し手の態度を文のモードとしてよいものかどうか、という問題であった。特定の姿勢の型 (Positionstyp) から特定の発語内行為が導かれる可能性を排除しない Wunderlich (1976) から、表記される態度と表明される態度を峻別し、後者の文のモードとの繋がりを見る Lang (1983) を経て、おそらく Altmann (1991) や Scholz (1991) にまで連なる線には、「話し手の態度＝文のモード」という見方がある。一方、これと鋭く対立するのは、BRRZ や Grewendorf/Zaefferer (1991) の枠組みであり、彼らの理論（むろん、同じではない）では、話し手の命題的態度は文のモードに一切、介入する余地がない<sup>34)</sup>。こうした対立の中にあって、先の

33) 例えば Palmer (1986: 116ff.) で、願望が文法化された例に挙げられているものは、もっぱら古典的西洋語の事例である。

34) BRRZ の枠組みに基づく Rosengren (1993) が、直観的に言って、話し手の態度表明と密接に結びついていると思われる願望文を文のモードとして認めたがらない理由も、多分に、この辺りにあるのではないか。



「私は言えません」は、話し手の態度の一種と見れば見えなくもない。

文のモードを話し手の態度の対応物と見なしてよいかどうか、という問題について、私の見解を言えば、話し手の命題的態度が極めて主観的で、操作しにくいものである以上、説明的理論の構築のためには、当然、これなしで済ませられるほうがよい。しかし、経験的には、話し手の態度を用いてはじめて記述可能な文のモードが見つかる可能性も否定はできない。

とすれば、願望文は、理論の説明力と経験による知との調和が試される試金石と言えよう。これまで、平叙文、疑問文、要求文と見てくる限りは、命題提示の責務と命題処理に関わる知識の違いとで定義してこられた文のモードであったが、願望文に至って、とうとう、話し手の態度を持ち込まざるを得なくなったのだろうか。

先の議論の流れの中では、ひょっとすると、「私は言えません」という、話し手の態度表明とも映りかねない命題提示法が、唐突に導入されたように見えたかもしれない。もし、「これさえ採り入れれば、うまく説明できますよ」というだけの理由で、話し手の態度を持ち込んだのであれば、ご都合主義との批判は免れまい。けれども、この批判は二重の意味で当たらない。

いま一度立論の過程を振り返ると、「私は言えません」という特徴づけは、構文型の影響からは切り離して中立に説明し得る意味論（適合型命題の真理条件と話し手の自己同一性）の延長で選択されたものであった。しかも、そうして選んだ「私は言えません」は、恣意的な思いつきでも何でもない。これは、要求文に認められた「私は君に言います」と「私は言います」とのあいだに論理的一貫性を有するものである。すなわち、「私は言えません」は、「私は君に言います」と「私は言います」の両方の可能性を否定するもの（「私は言う相手がいません」）にほかならないのである。

従って、「私は言えません」を、仮に広い意味で話し手の態度の一種と見なすにしても、それは、話し手の欲求に由来する、個人的、主観的な態度なのではない。それは潜在的ないし顕在的な他者に向き合って命題を提示する際の間主観的な態勢であり、私と君が向き合うことがその起源である。願望文の意味型

は、平叙文、疑問文、要求文の3つのモードがそうであったように、やはり話し手の命題的態度を介在させることなく記述できるのだ。この意味で、願望文もまた、現代ドイツ語において、正統的な文のモードをなすと言えるだろう。

また、「私は言えません」が「私は君に言います」と「私は言います」の両方の可能性に対する否定である以上、当然、これは、この二者を前提にしていることになる。つまり、「私は言えません」を表す文が、願望文として、文法的にコード化されるには、「私は君に言います」および「私は言います」の両方が、すでに文法的にコード化されている必要がある。ここから自ずと、願望文の平叙文や要求文に対する有標性が導かれる。願望文が、文のモードとしてあり得るにしても、このように有標の範疇をなす以上、それが、平叙文や要求文ほどの普遍的分布を示さなくとも、なんら不思議なことではない。<sup>35)</sup>

これで、願望文の周縁性にも、一定の説明が与えられた。願望文を文のモードと認めるのをはばかることは、もはやあるまい。

## 5. む す び

本稿では、現代ドイツ語における文のモードの体系を、要求文と願望文の分析を中心に、考察してきた。まず1.において、文のモードへの関心の起点に、構文型と機能とのプロトタイプ的な対応関係があることを確認したのち、2.では、文のモードへのアプローチの方法をいくつか検討した。主要な3種類のアプローチのうち、意味論的なアプローチがもっとも適切であることを明らかにした後、3.では要求文、4.では願望文を精査した。その結果、要求文には、命令文だけでなく要請文も含まれること、および、願望文が、平叙文、疑問文、要求文の古典的3モードに対置すべき、まっとうな文のモードであることが判明した。要求文と願望文は、ともに適合型の命題であるという特徴によって、平叙文や疑問文と対立する一方、命題提示の積極性の点で互いに区別される。

35) 有標性の原理と範疇の普遍性の関連については、Croft (1990: 64ff.)を参照せよ。

図式化して示せば、現代ドイツ語について、表2のような文のモードの体系と特徴を確認することができたわけである：

表2：現代ドイツ語における文のモードの体系

	表象型の命題 $p \supset \text{poss } p$	適合型の命題 $\neg p \wedge \text{poss } p$
積極的な命題提示 「私は（君に）言います」	平叙文	要求文 (命令文・要請文)
消極的な命題提示 「私は言い/言えません」	疑問文	願望文

文のモードは、文に関する文法的範疇として、さまざまな問題に関与すると思われる：直接話法から間接話法への推移、時制のモード性<sup>36)</sup>、法助動詞に代表される法的語彙の体系と機能、発話再現動詞の振舞い、条件文や補文をはじめとする副文の構造と機能、あるいは、非定形動詞の振舞いなどがそうで、ここには未解決の問題や謎が少なくない。本稿の結果は、今後、これらの方面でその有効性が試されることになるだろう。

## 参 考 文 献

- Altmann, H. 1993. "Satzmodus." In: Jacobs, J./Stechow, A. v./Sternefeld, W./Vennemann, T. (Hg.), *Syntax. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung*. Berlin u. a., 1006-1029.
- Austin, J. L. 1962. *How To Do Things With Words*. Oxford.
- Brandt, M./Reis, M./Rosengren, I./Zimmermann, I. 1992. "Satztyp, Satzmodus und Illokution." In: Rosengren, I. (Hg.), *Satz und Illokution*. Bd. I. Tübingen, 1-90. (=BRRZ)
- Bühler, K. 1982. *Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache*. (Ungekürzter Neudruck der Ausgabe von 1934.) Stuttgart u. a.
- Croft, W. 1990. *Typology and universals*. Cambridge.
- Donhauser, K. 1986. *Der Imperativ im Deutschen*. Studien zur Syntax und Semantik

36) Fabricius-Hansen (1999) や Lyons (1977: 809ff.) を参照せよ。

- des deutschen Modusystems. Hamburg.
- Eisenberg, P. 1989. Grundriß der deutschen Grammatik. (2. Aufl.) Stuttgart.
- Engel, U. 1988. Deutsche Grammatik. Heidelberg.
- Erben, J. 1964. Abriß der deutschen Grammatik. Berlin.
- Fabricius-Hansen, C. 1999. "»Moody times«: Indikativ und Konjunktiv im deutschen Tempussystem." In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik 113, 119-146.
- Fries, N. 1983. Syntaktische und semantische Studien zum frei verwendeten Infinitiv und zu verwandten Erscheinungen im Deutschen. Tübingen.
- 1992. "Zur Syntax des Imperativs im Deutschen." In: Zeitschrift für Sprachwissenschaft 11, 153-188.
- Grebe, P. (Hg.), 1959. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Mannheim.
- Grewendorf, G./Zaefferer, D. 1991. "Semantische Grundlagen der Sprechakte." In: Stechow, A. v./ Wunderlich, D. (Hg.), Semantik. Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung, Berlin u. a., 270-286.
- Grice, H. P. 1975: "Logic and conversation." In: Cole, P./Morgan, J. L. (eds.), Syntax and Semantics 3: Speech Acts, New York, u. a., 41-58.
- Haftka, B. 1984. "Zur inhaltlichen Charakteristik von Imperativsätzen." In: Untersuchungen zur deutschen Grammatik III, Berlin, 89-163.
- Haider, H. 1991. "PRO-BLEME?" In: Fanselow, G./Felix, S. W. (Hg.), Strukturen und Merkmale syntaktischer Kategorien. Tübingen, 121-143.
- Heidolph, K. E./Flämig, W./Motsch, W. (Hg.), 1981. Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.
- Helbig, G./Buscha, J. 1987. Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig.
- Lang, E. 1983. "Einstellungsausdrücke und ausgedrückte Einstellungen." In: Motsch, W./Ruzicka, F. (Hg.), Untersuchungen zur Semantik, Berlin, 305-341.
- Lyons, J. 1977. Semantics. Vol. 2. Cambridge.
- Näf, A. 1987. "Gibt es Exklamativsätze?" In: Maibauer, J. (Hg.), Satzmodus zwischen Grammatik und Pragmatik. Referate anlässlich der 8. Jahrestagung der Deutschen Gesellschaft für Sprachwissenschaft, Heidelberg 1986. Tübingen, 140-160.
- Oppenrieder, W. 1987. "Aussagesätze im Deutschen." In: Maibauer, J. (Hg.), Satzmodus zwischen Grammatik und Pragmatik. Referate anlässlich der 8. Jahrestagung

- der Deutschen Gesellschaft für Sprachwissenschaft, Heidelberg 1986. Tübingen, 161-189.
- 1991. Von Subjekten, Sätzen und Subjektsätzen. Untersuchungen zur Syntax des Deutschen. Tübingen.
- Palmer, F. R. 1986. Mood and Modality. Cambridge.
- Récanati, F. 1980. "Some Remarks on Explicite Performatives, Indirect Speech Acts, Locutionary Meaning and Truth Value." In: Searle, J. R./Kiefer, F./Bierwisch, M. (eds.), Speech Act Theory and Pragmatics, Dordrecht, u. a., 205-220.
- Rehbock, H. 1992. "Deklarativsatzmodus, rhetische Modi und Illokutionen." In: Rosengren, I. (Hg.), Satz und Illokution. Bd. 1. Tübingen, 91-171.
- Rosengren, I. 1992. "Zur Grammatik und Pragmatik der Exklamation." In: Rosengren, I. (Hg.), Satz und Illokution. Bd. 1. Tübingen, 263-306.
- 1993: "Imperativsatz und 'Wunschsatz'—zu ihrer Grammatik und Pragmatik." In: Rosengren, I. (Hg.), Satz und Illokution. Bd. 2. Tübingen, 1-47.
- Ross, J. R. 1970. "On declarative sentences." In: Jacobs, R./Rosenbaum, P. S. (eds.), Readings in English Transformational Grammar, Waltham, Mass., 222-272.
- Sadock, J. 1974. Towards a Linguistic Theory of Speech Acts. New York.
- Scholz, U. 1991. Wunschsätze im Deutschen—Formale und funktionale Beschreibung. Satztypen mit Verberst- und Verbletzstellung. Tübingen.
- Searle, J. R. 1969. Speech Acts. London u. a.
- 1975. "Indirect speech acts." In: Cole, P./Morgan, J. L. (eds.), Syntax and Semantics 3: Speech Acts, New York, u. a., 59-82.
- Wunderlich, D. 1976. Studien zur Sprechakttheorie. Frankfurt a. M.
- 1978. Modalisierte Sprechakte. Düsseldorf.
- 1984. "Was sind Aufforderungssätze?" In: Stickel, G. (Hg.), Pragmatik in der Grammatik. Jahrbuch des Instituts für deutsche Sprache 1983. Düsseldorf: Schwann, 92-117.
- Zifonun, G./Hoffmann, L./Strecker, B. 1997. Grammatik der deutschen Sprache. Bd. 1. Berlin, u. a. (=IDS)